

# 『十牛図』についての教育哲学的一考察（その2）

—主としてボルノーとフランクルの思想に依拠しつつ—

広 岡 義 之

## An Investigation of Educational Philosophy of “The Ten Ox-Herding Pictures” (Part 2)

—Focusing on the Thoughts of Bollnow and Frankl—

Yoshiyuki HIROOKA

### 要 旨

本稿の目的は、『十牛図』で提示されている人間形成論における実存的な真理が、主としてボルノーとフランクルの実存思想と深く共鳴していることを浮き彫りにすることである。『十牛図』がたんに禅宗のテキストという範囲にとどまるだけでなく、さらに幅広い学問領域、たとえば教育哲学領域の真理探究にも応用できることを明示することにある。（その1）では第4節「第二・見跡」「第三・見牛」とボルノーの庇護性の共通点までを叙述したので、本稿（その2）では、第5節「第四・得牛」と「第五・牧牛」の特徴、からの開始となる。

キーワード：『十牛図』、実存思想、自己超越、ボルノー、フランクル

### はじめに

本稿の目的は、『十牛図』で提示されている人間形成論における実存的な真理が、主としてボルノーとフランクルの実存思想と深く共鳴していることを浮き彫りにすることにある。『十牛図』の東洋的な実存的な思想が、こうした他の西洋の実存哲学思想とも深く呼応していることを傍証することを通して、『十牛図』がたんに禅宗のテキストという範囲にとどまるだけでなく、さらに幅広い学問領域、たとえば教育哲学領域の真理探究にも応用できることを明示することにある。本稿では、『十牛図』と、主としてボルノー、フランク

ルとの思想比較が中心となる。（その1）では第3節「第二・見跡」「第三・見牛」とボルノーの実存主義克服の「庇護性」の共通点までを叙述したので、本稿（その2）では第5節「第四・得牛」と「第五・牧牛」の特徴、から考察の続きを開始したい。

### 第5節 「第四・得牛」と「第五・牧牛」の特徴

●自分が本来的な自己を求めることによって、自己意識の外にある牛が自己を求めていてくれたことが見えてくる

そもそも『十牛図』全体の旅は、われわれの「苦

しみの逃避」からの脱皮として考えることができる。「第四・得牛」では、「自己の他者との出会いがある。自分が本来的な自己を求めることによって、自意識の外にある牛が自己を求めていてくれたことがみえてくるのである。」(生越, 1997: 92)「第四・得牛」において、「引きこもり」の問題を教育哲学的にはこのように把握できるのである。



「第四・得牛」

#### ●牧童が牛を求めているのではなく、牛が牧童を求めている

佐藤は、上田の「牧童が牛を求めているのではなく、牛が牧童を求めている」という考えは極めて重要であると鋭く指摘している。すなわち、われわれが「真実の自己」を求めているのではなく、「真実の自己」がわれわれを求めているという解釈が正しいのではないかと上田は問うている。(佐藤, 2002: 228-229) この視点「われわれが人生に問いかける」という自己中心的在り方は、フランクルのいわゆる「人生がわれわれに問いを投げかけている」という他者中心的在り方と共通項を持つと思われるが、この点は本稿の後半で詳述したい。

#### ●「第五・牧牛」の特徴

「第五・牧牛」では「牧童が手綱で牛を牽き、牛はその後についてくるものとして考えなければなりません。それが牧童の主体性を示し

ています。そして、牧童と牛が一体になり、牧童が牛に身を任せる段階は次の『騎牛帰家』になります。」(佐藤, 2002: 235)

求めることは実は、求められていることを意味する。人間が神を求めるのは、実は神に求められているということでもある。『十牛図』で言えば、牧童が牛を求めているのであるが、ある意味では牛が牧童を求めているとも言える。牧童が牛に和み、牛の行く方向に先立って歩いていく。こうした双方向性の相互浸透によって、牧童と牛の統一が成熟してくるのである。(上田・柳田, 1982: 29) こうした『十牛図』の人間学的課題は、以下のボルノーの「庇護性」の思想と深い共通点を見出す。



「第五・牧牛」

#### ●ボルノーの「庇護性」概念と「第四・得牛」「第五・牧牛」の共通項

ボルノーによれば、人間の実存的な決断は、人間の主体的生き方にとって極めて重要である。しかし常に決断することに迫られている生活ばかりでは、精神的に息苦しくなってしまう。そしてそこからは決して安らいだ生き方を経験できなくなってしまう。そこでボルノーは随意性の徳である希望や安らいでいること、感謝という徳を人間が経験できるように、「新たな庇護性」という概念を要請したのである。『十牛図』ではこれが「第四・得牛」から「第五・牧牛」への移行によって実現されているものと筆者は理解している。なぜ

なら、「第四・得牛」では、自己の他者との出会いがあり、自分が本来的な自己を求めることによって、自意識の外にある牛が、自己を求めていることが理解できるからである。自分の力だけでは、けっして人生の意味は実現できないのである。自己成就が実現されるためには自己の外の存在が自己を「支え・庇護」してくれていなければならない。ボルノーによれば、こうした庇護され支えられた状況で初めて希望、安らぎ、感謝の徳が生じるといふ。また「第五・牧牛」において、牧童が牛を求めているのであるが、ある意味では牛が牧童を求めているとも言える。牧童が牛に和み、牛の行く方向に先立って歩んでいく。こうした双方向性の相互浸透によって、牧童と牛の統一が成熟し、人間の実存的主体性と庇護性がともに成就されるようになってくる。ここにも『十牛図』と、ボルノーが強く主張する「庇護性」の親和性をわれわれはたやすく見出すことができよう。

## 第6節 ボルノーにおける「住まうこと」と「第六・騎牛帰家」<sup>きぎゅうきか</sup>との共通点

●「ひきこもり」や「保健室登校」という現代的な教育問題解決の人間学的端緒としての「第七・忘牛存人」

牧童が牛に乗って向かう先は、あるべきところに落ち着く象徴としての「家」である。この「家」は、われわれが日常生活を営んでいる現実世界を意味する。牧童が牛を探し求めて向かったのは山の中で、そこで初めて牛を見出した。それと同様に、「真実の自己」はこの現実世界では見つからない。(佐藤, 2002: 239)

「第六・騎牛帰家」<sup>きぎゅうきか</sup>で初めて、自らが「庇護された家郷」に到り着いた。主人公はここで初めてまさにボルノーのいう「基地性」を獲得したわけであるが、「第七・忘牛存人」<sup>ぼうぎゅうそんにん</sup>では、主人公はいい意味で牛を忘れていふ。(上田, 2002: 145))ここで「庇護された家郷」「基地性」という人間学的概念は、ボルノーの実存主義克服の主要概念

である「庇護性」やそれにもとづく「住まうということ」の在り方とほぼ軌を一にする考え方であることが浮き彫りにされており、筆者には極めて興味深い。人間はこうした「庇護された家郷」や「基地性」を保持しないと、健全な生を営むことができなくなる。ここに「ひきこもり」や「不登校」「保健室登校」という現代的な教育問題解決の人間学的端緒を見出すのである。

●「第六・騎牛帰家」と「第七・忘牛存人」は、世界によって庇護されて安らぎを感じることができる状態

それとの関連で上田は言う。「忘れるべきでない牛を忘れるというのではなくて、もう牛のことは全然考えない、考える必要がないということです。考える必要がないから考えないというのではなくて、牛と本当に一つになっているからです。」(上田, 2002: 146)ここにもボルノーの実存主義克服の庇護性の概念が垣間見られる。すなわち、人間の瞬間瞬間の決断で疲弊するかわりに、世界によって庇護されて安らぎを感じることができる状態が、「第六・騎牛帰家」<sup>きぎゅうきか</sup>と「第七・忘牛存人」<sup>ぼうぎゅうそんにん</sup>に相当する。さらにフランクルの思想でいえば無意識の精神性の概念がこれに相当する。フランクルは無意識の精神性の重要性を、ユーモアを交えて、足の多いむかでの事例で紹介する。むかだが、足の存在を意識し始めると、そのとたんに、どの足を順番に動かしたらよいかわからなくなり、混乱して歩けなくなるというものである。この比喩を通して、自意識過剰な人間にとって、いかに無意識の精神性が、健全な生を営むうえで重要であるかを強調している。

●『十牛図』とフランクルに共通する「抑圧解除」の重要性

『十牛図』において牛が登場するのは、あることをただほんのしばらくの間だけ人間が意識的にしやすくするために他ならない、という考え方はユニークであり、フランクルのロゴセラピーと相通ずるところが大きい。フランクルに即して述べ

るならば、自意識過剰の広場恐怖症のクライアントに、意識的にわざと広場に行き、倒れてもいいのでそこでがまんして滞在するという逆説的な課題を与えると、実のところそのクライアントは倒れもせず、何事もなく過ごすことができた事例に該当する。すなわち、ロゴセラピーは、「あることをただほんのしばらくの間だけ人間が意識的にしてやること」で、抑圧が解放されて、症状が改善されることになる。本質的に、無意識な創造の過程が、過度の意識作用の阻害的な影響から解放されて、無意識の有する創造力のいわば抑圧解除がなされたと考えることができよう。

### ●意識過剰のためにヴァイオリンが弾けなくなったヴァイオリニストの例

フランクはさらに意識過剰のためにヴァイオリンが弾けなくなった音楽家の例を取り上げている。普段は無意識の創造過程でじょうずに弾けるのだが、過度の意識が働き、不要な事を考えすぎて抑圧されてしまい、まったく弾けなくなってしまった。その音楽家が、フランクのロゴセラピーを受けることによってヴァイオリニストの「脱・反省」を促し抑圧解除がなされ、ふたたびヴァイオリンが元のように弾けるようになった。この事例は、まさに無意識の有する芸術的創造力のすばらしさが彼の意識に比べてどれほど音楽的であるか、ということに気づかせて、彼の抑圧解除がなされた好事例と言えよう。（広岡、2008：152）上田が、「忘れるべきでない牛を忘れるというのではなくて、もう牛のことは全然考えない、考える必要がないということです。考える必要がないから考えないというのではなくて、牛と本当に一つになっているからです。」という場合、こうして牛と本当に一つになっている自分が、まさに無意識の有する創造力のいわば抑圧解除がなされ、自己の「居場所」を獲得し得た事例と共通する。

### ●「本来的自己」は自己を求めてくれており、自己を庇護して（支え包んで）いる

また教育学者の生越<sup>おごせ</sup>達は以下のような興味深い

指摘をしている。「牛は自己を常に待ち続け、自己のときどきの状態に応じて姿を現してくれていたのである。ここには牛の能動的受動性が示されている。本来的自己は実はそのときどきの自己の姿に応じて自己を求めてくれているのであり、その意味で自己を支え包んでいる。」（生越、1997：92）

こうした生越<sup>おごせ</sup>の『十牛図』の捉え方は、ボルノーの庇護性の概念と共通項を有すると考えられる。人間は支えられ包み込まれているという「庇護性」を獲得することなしには、安心してひと時も有意義にくつろぎ得ないとのボルノーの主張と軌を一にする。（広岡、2019：358-379）

さらに続けて生越は言う。「ここに自己に内在する否定性とは異なる側面が見えてくる。それは自己の基地性であり、あるいは家としての側面であり、自己の全体性・統合性である。」（生越、1997：92）という。こうした『十牛図』の「自己の基地性」概念は、まさにボルノーの空間論における「家」概念、すなわち、「住まうこと」の概念を彷彿とさせる。（広岡、2018：95-122）私見によれば、ここですべてに共通する見解は、支えられ、包まれ、庇護されているという実存主義的硬直と対極にある超越的な哲学的思想なのである。

### ●ハイデッガーとの対決で浮かび上がるボルノーの「住まうこと」の思想

ボルノーは上述の「家」概念を含む空間への関わり方の一つとしてハイデッガーから出発し、次のような考察を展開した。すなわち、ハイデッガーは人間が世界のなかに存在すること「世界・内・存在」を「投げ出されていること」（das Geworfen-sein）、すなわち「被投性」として性格づけている。この人間の「被投性」は、実存哲学の「空間」への関わりを最も鋭く描き出したものであり、人間は自分の意志を越えたものによって投げ出され、未知な敵意のある媒体のなかに在るのを覚える。こうしてボルノーは現代に生きる人間を、バシュラール（Gaston

Bachelard) と共に「故郷喪失者」、あるいは「根こそぎにされた人間」として特徴づけた。(広岡, 2018: 97) 教育の領域に引き付けて考えたとき、この「故郷喪失者」「根こそぎにされた人間」とは、まさに引きこもりの若者、不登校児童、保健室登校しかできない子どもの存在を彷彿とさせる。こうした教育問題の解決策の端緒が以下のボルノーや『十牛図』の思想に込められている事は、筆者には興味深いさらなる考察対象となる。

### ●引きこもりの若者、保健室登校しかできない子どもへの対応策の教育哲学的端緒

ボルノーは人間の空間に対する本来的な関与の仕方は「被投性」ではなく、むしろ「住まうこと」であると確信している。もちろんボルノーは、ハイデッガーの捉える人間の「被投性」(Geforfenheit) の概念が、根こそぎにされた「寄る辺なき現代人」を特徴づけるのにふさわしい空間への関わりを示すものであることを認めている。その上でボルノーは、しかしただこの「被投性」という概念を人間全体に転用することには十分に用心をせねばならないと警告する。ボルノーはさらに続けて言う。むしろ逆に、ハイデッガーの被投性は「人間の空間への関係において人間に何か本質的なものが欠けているかぎりでの現代人を特徴づけている。それとの関連でボルノーは、ハイデッガーとは反対に、人間の本質を「住まうこと」と定義づけ、その思想の根底に家のなかに安らぎを感じ、「庇護される状態」(Geborgenheit) の概念を樹立した。これが禅のテキスト『十牛図』「第六・騎牛帰家」における「基地性」と同じ概念であると筆者は確信している。

ボルノーのこうした思想の背景には、「実存主義克服」という契機が含まれていることが忘れられてはならないだろう。「純粹意識の観念論的決着に代わって、人間が環境のなかに結びこまれていることを認めたのは、正に実存哲学の功績であった」(Bollnow, 1979: 152 ボルノー, 1978: 173) と述べつつも、ボルノーはさらに実存主義の克服の途を模索しようと試みる。



「第六・騎牛帰家」

### ●ハイデッガーの「決意性」とボルノーの「安らぎ」「庇護性」概念

ここからボルノーはハイデッガーの「決意性」(Entschlossenheit) の概念を、人間を孤立化し束縛する「閉鎖性」(Verschlossenheit) として批判してゆく。佐伯守も指摘するように「ハイデッガーの『決意性』の概念は、死を先どりする『先駆的決意性』によって極限化されるものであるが、死の先どりというネガティブな方法でしか、自己肯定にいたりえない発想への批判として、ボルノーが提起する概念は『希望』(Hoffnung) あるいは『希望の地平』である」。(佐伯, 1979: 198)

われわれのここでの中心テーマである「住まうこと」(Wohnen) の思想のなかに、ボルノーの希望の存在論の端緒を見出すことができる。それゆえ、われわれは佐伯守と共に次のように述べることが許されよう。すなわち、「住まうこと」が成立するためには、その地平は希望的・肯定的なものであり、人間に安らぎと庇護性を与えるものでなければならない。(佐伯, 1979: 199) ボルノーは、実存主義の哲学者が考える「被投性」への誤解を批判しつつ、人間は世界のなかへと投げ出される前に、家のなかで庇護され、その場所に根をおろして「住まっている」のである、と主張する。

これまで端的に「住まう」と述べてきたが、それはいったい何を意味するのか。その効果的な

説明として、われわれはボルノーが後期ハイデッガーのダルムシュタット講演、「建てること、住まうこと、考えること」を取り上げている点に注目してみよう。ここでハイデッガーは、以前の「被投性」としての人間存在の規定を修正して次のように述べていることが注目に値する。人間であるということは「住むこと」である、と主張するハイデッガーはさらに、人間は住むことを「学ばねばならぬ」と強調する。ボルノーはこれとの関連で次のように考える。「なぜなら、住居を所有するだけでは決して住むことを意味せず、むしろ住むこと自体が一つの課題であって、それは世界にたいする人間の全関係を徹底的に変化させることを意味し、人間が極度の緊張と最も内面的な本質の革新、まさに実存主義の克服によって初めて見だし得るものだから」（ボルノー、1978：159）である。

#### ●ボルノーにおける「根つき」の概念と「新たな居住化」の問題

ボルノーが、家屋の人間学的概念の核心として「住まう」という概念を提示するときには、「住まう」ということのなかに表れている人間自身の構えが問われることになる。そこで第一に取り上げられるべき特徴は、「根つき」の問題である。ボルノーによれば、「住まうこと」はある特定の位置に、そこにふさわしいものとして適合し、そこに根をおろし、そしてそこでくつろいでいることである。岡本英明は、この「根つき」の概念を、ボルノーの「新たな居住化」(neues Wohnhaft-werden)の問題として捉え、その根本課題を次の点にみている。すなわち、この世界に生の確固たる拠り所を見出し得ない「寄り辺なき存在」「故郷喪失者」としての現代人が、この世で「新しい故郷」をいかにして創り出すことができるのかを問うている。ボルノーはこうした現代人の危機の唯一の突破口を、とりわけ実存主義との対決から生ずる空間感情の根本的变化を特色づける「住まう」という根本概念を用いることによって、われわれに一つの示唆を与えてくれる。(岡本、1972：15)

### 第7節 実存主義克服としての「庇護性」と「第七・忘牛存人」の共通点

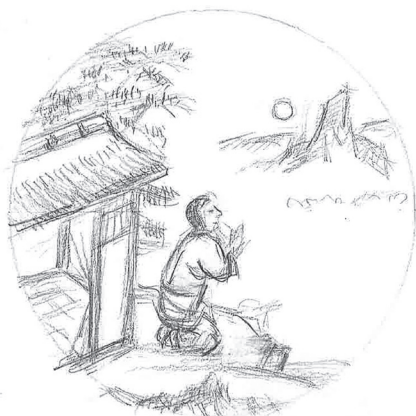
#### ●牛と牧童が一体となるということは「真実の自己」とそれを求める自己が一体となること

自己は、「真実の自己」を意識する必要もない。牛と牧童が一体となるということは、「真実の自己」とそれを求める自己が一体となることであり、「真実の自己」が実現されたのがこの「第七・忘牛存人」<sup>ほうぎゅうそんにん</sup>なのである。(佐藤、2002：245)

そこで上田は言う。「第六では求める自己が求められている真の自己と一つになるという方向であったが、第七ではその一体の内では真の自己が現実の人になったのである。」(上田・柳田、1982：31)「第七・忘牛存人」において牛の姿が消えて、「人」が現れ、しかもものんびりとのどかな雰囲気の中なかで、人が自然の中なかで泰然自若に過ごしている。ここでは「本当の自分にならなければならない」という真剣な実存的な努力のようなことも、もうないわけです。」(上田、2002：161)上田もまた明確に、「第七・忘牛存人」においては実存的決断というよりも、実存主義克服の庇護性の重要性を、「真剣な実存的な努力のようなことも、もうない」という表現で鋭く言い切っている。ボルノーもまた、こうした人間の生の在り方を「庇護性」「被包感」という概念で、実存主義克服の問題として取り上げたのである。そして筆者は、『十牛図』の「第七・忘牛存人」のなかにボルノーの「庇護性」「被包感」「安らぎ」という概念を重ね合わせる事が可能であることを確信できた。(広岡、2019：358-379)

#### ●ボルノーの「安らぎの空間」と「居場所作り」の共通点

生越にしたがえば、「第七・忘牛存人」<sup>ほうぎゅうそんにん</sup>では、牛と牧童が一体化したので、もはや自己を牛と牧童との二重の自己として表現する必要はなくなる。自己を二重化することがそもそもの誤りであったという。「ここでは自己は自己として安ん



「第七・忘牛存人」  
ほうぎゅうそんにん

じていられる。そして牧人はゆったりと『家』に横になっている。ここは何不自由なく落ちついていられる居場所である。自己が自己として二重化せず統合されていることが居場所をもつことの意味である。」(生越, 1997: 93)

私見によれば、不登校児にとって、何不自由なく落ちついて寛げ、しかも自己が自己として二重化されず統合されている「居場所作り」が必須の課題となる。心理学的な「居場所作り」についての哲学的根拠をわれわれはボルノーの「空間論」に鮮やかに見てとることができるだろう。この点については本稿最後の箇所、詳述することにする。ボルノーは「真の安らぎの空間」あるいは「住まうこと」というテーマでそれを深く人間学的に論じている。(広岡, 2018: 95-122) そしてわれわれは、ボルノー以外でも『十牛図』のなかに安んじて寛げる「第七・忘牛存人」の場所を見出すことができたのである。

### ●自己の第二の意味での否定性

生越にしたがえば、「第七段階まで、一度否定された自己が統合された。荒々しい野生に見えていた本来的な自己が実は自己を支えてくれる存在であった。そしてそのことが見えてくると同時に自己はごろっと横になれる『家』に安んじていたのであった。だが再び「第八・人牛俱忘」では自己の一つの否定性が示されている。自己の第二

の意味での否定性である。しかもここに示されているのは、すべてを捨て去るという徹底的な否定性である。」(生越, 1997: 93) この徹底的な否定性を示す「第八・人牛俱忘」については場所を改めて論じることになるだろう。

### ●牛と牧童が一体となる意味は、「真実の自己」とそれを求める自己が一体となること

「真実の自己」を獲得するということは、自己に「真実の自己」が実現されていることを意味する。自己と異なる「真実の自己」はありえない。自己は「真実の自己」を意識する必要もないのである。牛と牧童が一体となるということは、「真実の自己」とそれを求める自己が一体となることであり、「真実の自己」が実現されたのがこの「第七・忘牛存人」なのである。(佐藤, 2002: 245)

「真実の自己」を実現する主体は自己にある。そして「真実の自己」を獲得して安堵している段階がこの絵で示されている。ある意味で、目的はこの段階で達成されたのであるが、『十牛図』はここで終わらない。これからさらなる飛躍的展開が待っているのである。(佐藤, 2002: 246)

### ●自己が真に自己である場所に帰着した状態としての「第七・忘牛存人」

「第七・忘牛存人」は、自己が真に自己である場所に帰着した状態を表している。牧童と牛の親密化を通して、「場所的自己」が提示されている。牛と全く一つになり、牛が完全に自己化されている。自己自身が牛であるがゆえに、牛のことはすっかり忘れてしまったという意味である。(上田・柳田, 1982: 31)

家に還って真に自己が自己自身になった。牛も消えて、牛を求めた在り方も消えた。表象されるような「真の自己」なるものは存在しないのが本当のところなのである。そこで上田は言う。「総じて一切の有形有相の自己像、あらゆる概念的ないし実存疇的自己把握は((中略)『神の前に立つ単独者』〔筆者註: 実存哲学の開祖キルケゴールの言葉〕(中略)等々であっても)その有形性、

有意味性の故に、当の自己自身であるところでは消えるのである。」（上田・柳田，1982：31-32）私見によれば、この上田の主張はまさに「神の前に立つ単独者」としての実存的在り方が克服されたボルノーの「実存主義克服」の後の「安らぎ」や「包み支えられること」等の概念と深く関連してくることになる。

## 第8節 ボルノーにおける「新たな庇護性」概念と『十牛図』の類似性

### ●実存的危機の本質

人間の生活はそれがうまく運ばれている限り、決断を必要とすることなしに経過する。それゆえ、人間が決断を絶えず前提にする必然性はまったくない。決断を基準として生の方向を定めることは、人間のそれ以外の実り豊かな可能性を自らの手で閉ざし、硬直した一面性へ落ち込むおそれを孕むことになる。このような閉鎖性に対してボルノーは、マルセル（Gabriel Marcel）のいう「随意性<sup>ずいせい</sup>」の概念を導入した。随意性とは、「けっして予見しえない未来のいろいろの可能性に対して自己を開き、（中略）最終的に下された決断から生じる決意性とは厳密に対立する」（Bollnow, 1979：54 ボルノー，1978：55）概念である。そうになると、「随意性の徳」を実存的倫理の硬直と危機を克服する、一つの反徳目として捉えることがふさわしくなる。そこでは、人間の孤立を乗り越えるために未来との支持的な関係を獲得する、という要請が浮かび上がってくる。

人間はしかしながら、自らの手でこのような支持的な関係を獲得できない。ボルノーは、「人間自身がある特定の内的状態にある限りでのみ、このことが可能である」（Bollnow, 1979：57 ボルノー，1978：58）と確信している。ここで「特定の内的状態」とは、人間をとり囲んでいる世界と未来に対して維持される「敬虔な信頼<sup>けいけん</sup>」（Vertrauen）の状態のことである。随意性の徳は、この信頼を中心として形成され、そこから「安らいでいること」（Getrostsein）・「忍耐」（Geduld）・

「希望」（Hoffnung）・「感謝」（Dankbarkeit）という主要な徳が関連しあうことになる。

### ●新たな庇護性の諸徳の位置づけ

それとの関連でボルノーは、『教育的雰囲気』の結語において次のように述べている。「旧来の理論ではとらえられなかった、このような（第三の）可能性を、私は以前、出会いとか、訴えとか、危機等々のごとき、教育の＜非連続的諸形式＞において浮彫りにしようと試み、それらを独自の教育学的範疇として把握しようと努めた。しかし、今やここに、全く違った方向に、新しい教育学的基本範疇の可能性が見られる。しかもそれは右の実存的領域におけるとは異なり、完全に連続的な生の諸過程そのものの圏内においてなのである」。（Bollnow, 1970：110-111 ボルノー，1980：207）

ここで、ボルノーの言う「それは右の実存的領域におけるとは異なり、完全に連続的な生の諸過程そのものの圏内においてなのである」とはどのような領域のことであるのか？

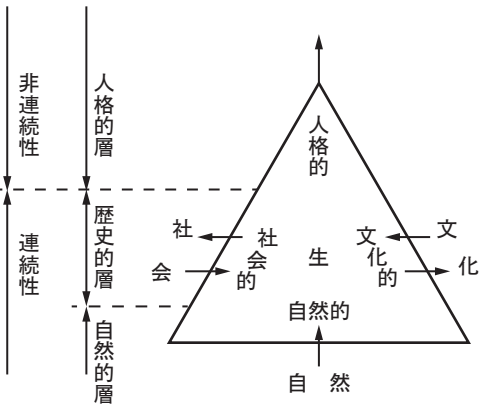
以下ではその点に絞って考察してみよう。

ボルノーのいう「新しい庇護性」の諸概念のもとに展開される連続的形式は、上述の伝統的教育学における連続的形式と、明らかに質的差異が存するものであると考えられる。＜図②＞における連続性の層に伝統的教育学における連続的形式が符号するならば、「新しい庇護性における新たな連続的形式」は別に位置づけられる必要がある。それ故、次にいかなる位置づけがなされるか、ということが考察されねばならない。

### ●高坂正顕の提言

この問題を高坂正顕の『私見、期待される人間像』（1965）を手がかりとして論じてゆくことにする。高坂は、実存哲学と生の哲学を「超越」という共通概念で明確に区別する。彼は実存哲学を、「上への超越」と定義して次のように述べている。すなわち、「キルケゴール（Søren Aabye Kierkegaard）においてはけっきょくはキリス





図②

トの信仰というものが根本にあり、本来の自己 (eigenes Selbst) が求められているのである。その本来の自己すなわち実存 (Existenz) は、神への超越、決断による飛躍を通じてのみ得られるということを考えてみれば、キルケゴールの実存主義は、いわば「上への超越」を求めるものだといつてよいであろう。(高橋, 1983 : 43-58) この「上への超越」は、図②との関連で考えるならば人格的層の上方に向けて、つけ加えることが許されよう。(広岡, 2019 : 376-379)

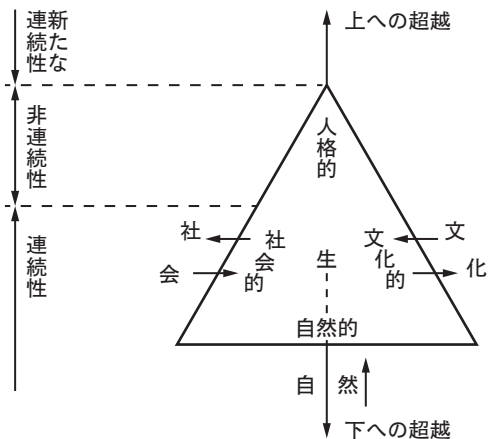
「安らいでいること」の特徴が、前半の箇所では次のように述べられた。すなわち、この徳は人間の力だけで獲得できるものではなく、恩寵として人間に授けられている一面がある。われわれはここに、安らいでいることの特異なパラドクスをみる、と。つまり、上への超越において初めて「恩寵」という概念が把握しうる。そしてそうした超越概念なしには、人は「安らいでいること」はできない。ここに、非連続を越えた新たな連続性の諸徳が問われる所以がある。同様の思想は忍耐の徳でも見られた。いかなる理性によっても証明することのできない希望が、なんらかの形で忍耐のなかにあることが、依然として前提にされている。希望の徳においては、予見できない未来に対して自己を開放することによって、種々の要求を意のままにすることができる。ここに至ってわれわれは、このような未来を威嚇と受け取る必要

はない。むしろ逆に未来は人間を慈悲深く迎えてくれる、支持的な根底のようなものとなる。さらに感謝の徳は、人間が実存主義的硬直を克服する証拠となる。それは、庇護性の必然的表現であり、人間が独力で創ることはできない世界である。(高橋, 1983 : 43-58)

●上への超越としての新たな連続性としての庇護性

これらの諸徳に共通して言えることは、非連続的形式を上へ超越した後に獲得する支持的な根底、という新たな生の連続的形式の思想が存することである。これを図式化してみると、図③のようになる。(高橋, 1983 : 43-58)

すなわち、人格的層の上にく上への超越」が位置づけられる。それに符号するものが、ボルノーのいう「新たな連続性」である。このように、伝統的な意味での連続性の教育と、支持的な根底という新たな連続性の教育は、まったく次元の異なった位置にあるという認識がなされなければ、ボルノーの実存主義克服の真の解釈は困難になる。ボルノーのいう「新たな連続的形式」とは、実存主義的な非連続的形式を踏まえつつも、それを超越した後に初めて獲得することのできるものである。と同時に、それは神の恩寵としてまったく上から与えられる支持的な根底なしには成立し



図③

えないものである。この意味でボルノーの「希望の哲学」の核心である「信頼」という概念もまた、高坂のいう「上への超越」と共通項を有するものと思われる。（広岡，2019：376-379）

ここに『十牛図』「第七・忘牛存人」もまたボルノーのいう「庇護性」という特質を含有するという共通項を見出すことが可能となるのである。以下ではこうしたボルノーの視点と重ねつつ、『十牛図』の人間学的意味をさらに探っていきたい。

### ●『十牛図』における「家」とは何か

上田に従えば、自己はただ自己という定義はできず、「何処に」という場所が含まれての自己、すなわち、「場所的自己」ということになる。何処を落ち着きどころとするかで、自己の質も決定されてくる。上田は言う。「家からすっかり遠ざかってしまっているということに気がついて、十牛図の歩みが始められ、第六『騎牛帰家』で『家に還らんと欲す』、すなわち、一体性そのものがその帰趨、真の落ち着きどころへと還って行こうとするわけです。」（上田，2002：150）これはまさにボルノーがハイデッガーに依拠しつつ指摘した「世界・内・存在」としての「被投性」の状態から「庇護性」としての「住まうこと」の状態への変化を指し示すものと言えるだろう。

それではそもそも「家」とはわれわれにとってどのような意味があるのだろうか。どのような「家」が真の家なのか、さらには自己の本当の場所はどこのようなものなのか。「第六・騎牛帰家」では、家に還らんと欲するわけであるが、そこからさらに第七、第八、第九、第十へと歩みが進んでいく。「第七・忘牛存人」では、牛がすっかり人の中に入って、牛の姿が消える。この「忘牛」において、本当の人がそこに厳然として現われてくる。それが「存人」の意味である。（上田，2002：151）

### ●「第七・忘牛存人」におけるのどかな「雰囲気」と、ボルノーの教育的「雰囲気」における安らぎや信頼概念の共通項

「第七・忘牛存人」において牛の姿が消えて、「人」が現れ、しかもものんびりとどかな「雰囲気」のなかで、人が自然のなかでゆったりと過ごしている。こののどかな「雰囲気」と、ボルノーの教育的「雰囲気」における「安らぎ」や「信頼」概念は人間学的には同根であると思われる。さらに上田は、「本当の自分にならなければならないという真剣な実存的な努力のようなことも、もうないわけです。」（上田，2002：161）この上田の人間学的視点についても、ボルノーの実存主義克服の新たな庇護性や「支え包まれる」という概念と共通項を有する事実は筆者にとってはきわめて重要な意義を持つ。『十牛図』の「第七・忘牛存人」の段階で、真剣な実存的努力が必要ないという理解は、まさにボルノーの非連続を超えた新たな連続性の諸徳である安らぎ、感謝、希望と同じレベルの場所に存在することを、われわれは容易に理解できる。

### ●真の「われ」は、「われは、われならずして、われなり」という自覚

「第六・騎牛帰家」では、牧童と牛との一体性が成立したが、そこではまだ「自己の成就」には至っていない。その一体性が「家」に還ろうとするところだった。ここから自己とは、その関わりが行われる「場所」が、自己を自己たらしめる構造に深く関与していることが容易に理解できる。（上田，2002：158）

人間存在論の基礎構造はハイデッガーのいわゆる「世界・内・存在」であるが、そこでは「われ」は「われ」として成立している。しかし、そうした「われ」は、元来はそのつどの他者や物事と交わる意味空間としての「場所」と深く関わっているのが現実ではないだろうか。「われ」と言い切ることができるのも、「場所」に於いてであるという自覚が重要になる。「世界・内・存在」の「世界」は、様々な場所を包括する意味空間のことである。（上田，2002：158）

真の「われ」は、「われは、われならずして、われなり」という自覚である。「自己ならざる自己」

とも表現できる。上田は続けていう。「そのようにして開かれた『われ』は、『われ』として世界内存在ですが、『われならずして』と『われ』を切り開く開けは世界を超え包んだ限りない開けです。イメージで言えば虚空とも言うべき。『われは、われならずして、われなり』という真の『われ』の『於いてある場所』は、ただ『世界』というだけでなく、『世界／虚空』です。人間存在の場所は、究極的には、世界と、その世界を超え包む虚空と、このように二重になっています。その際、限りない開けである虚空はそもそも見えないものだから、『世界／虚空』は見えない二重性をなしています。」(上田, 2002: 159)

### ●ボルノーと上田の共通点

こうした上田の『十牛図』における「世界・内・存在」理解と、ボルノーが捉えたハイデッガーの「世界・内・存在」理解はどこにその共通点が見出されるだろうか。ボルノーは、ハイデッガーの「世界・内・存在」を「被投性」として、より具体的には「故郷喪失者」として、人間を理解した。そしてそれを克服する方法として、実存主義克服の「庇護性」を対置して提案したのである。上田の場合、真の「われ」は、「われは、われならずして、われなり」という自覚で表現した。真の「われ」は、「世界・内・存在」であるものの、世界を超え包んだ限りない開けとしての「われ」なのである。それはボルノーのいう「庇護性」と同根であり、ここに両者の共通項を見出すのである。

## 第9節 不登校克服の端緒としての支持的存在への通路である「庇護性」

### ●外界が人間にとって近づきうるように感じたとき、人間は自ら幸福な精神状態にある

ボルノーが主張する「庇護性」の特徴は、人間の実存的動揺を超越して、自己自身のうちに、新しい確固としたよりどころを築くための人間の内面的状態を指し示す。(Bollnow, 1979: 147 ボルノー, 1978: 167)

ボルノーにとって「庇護性」とは、人間を超えた外界にあって人間を支え保護している存在のことである。こうした存在論的連関の中でのみ、われわれは人間の「新しい庇護性」について有意義に論じることが可能となる。ボルノーは実存哲学の負の側面として、重苦しい圧迫的な気分を指摘したうえで、そうした「気分」は人間を世界から締め出し、自己自身のうちに閉じ込めてしまう。そしてその結果、人間を孤独へ陥れると考えている。その逆に、人間が外界に対して開かれており、この外界が人間にとって近づきうるように感じたとき、人間は自ら幸福な精神状態にあるという。(Bollnow, 1979: 148 ボルノー, 1978: 168)

### ●学校に来ることができるようになった不登校児童

こうしたボルノー教育哲学の指摘については、これまで観念的・抽象的にしか筆者は考えてこなかった。しかしながら、「われわれ」を、様々な事情で学校に、あるいは自分の学級に足を運ぶことのできない多くの「不登校児童生徒たち」と置き換えることができるのではないかと考えるようになった。「不安と絶望にかられて、いっさいの支持的なく生の関連>から引き離された」人間とは、紛れもなく、不登校の児童生徒たちの存在そのものであり、保健室登校を余儀なくされる子どもたちと読み替えることができるのではないか。

その逆に、人間が外界に対して開かれており、この外界が人間にとって近づきうるように感じたとき、人間は自ら幸福な精神状態にあるとボルノーは考える。「こころ」の壁を感じて、所属する学級の戸口の前までは来ることができるのに、そこから先は足が竦み、クラスの中に入ることができなかった子どもが、実際のビデオ映像(木村泰子制作)で取り上げられているのを筆者はある機会に見ることができた。その後、様々な先生方や友達の援助や協力を経て、ついに自分の所属するクラスに入ることができるようになった同じ不登校児童の姿のビデオ画像を目の当たりにしたとき、その子どもの内面に、明らかな変化が生じていたことを、筆者は明確に感じ得た。すなわち、

その子どもが「外界」という所属学級に対して開かれるようになり、この外界〔所属する学級〕が、その不登校児童にとって「親しみのある近づきうる空間」に変貌しており、そのように感じ始めることができたからこそ、その児童は自ら「幸福な精神状態」になりえて、そのときに初めて、自分のクラスに足を踏み入れることができたのである。（木村，2015 および木村自身が作成したビデオを参照。）

●優位性は「内なる世界」にあり、その内なる精神世界が実は、「外なる世界」である現象界を包み込んでいる（若松英輔）

こうした状況を、キリスト教（カトリック信仰）の立場で、深く霊性や精神性について、哲学的、文学的、詩的、宗教的に幅広い観点から、一貫して実存的に語り続けている稀有な批評家、若松英輔は次のように表現している。彼にあって、優位性は「内なる世界」にあり、その内なる精神世界が実は、「外なる世界」である現象界を包み込んでいるのだ、と指摘してみせる。つまり、不登校児童にとって、彼・彼女の「内なる世界・魂」が、学級の同級生や教師との信頼という内なる精神状態で満たされたときに初めて、「外なる世界」としての現象界である、自分の所属するクラスに足を踏み入れることができた。筆者には、優位性は「内なる世界」にあり、その内なる精神世界が実は「外なる世界」である現象界を包み込んでいる、という若松の鋭い指摘が、教育臨床の場面で極めて具体的に理解しえた。

これを『十牛図』に引き付けて考えてみよう。私見ではあるが、ここで優位性としての「内なる精神世界」とは「真実の自己」の象徴である「牛」で表現されている。他方、「外なる世界」である現象界で生きる存在の象徴が「現実の自己」としての「牧童」である。『十牛図』はこういう構図で成立しているのではないか。「第七・忘<sup>ほうぎゅう</sup>牛<sup>そんにん</sup>存人」で、ついに人の中に牛が入り込み、そこで初めて「真人」となった。つまり、「真人」とは、現象界で生きる傷つきやすい人間の内面に、「内

なる精神世界」としての牛が入り込んで、現実世界でも力強く生き得る真の「生きる力」がついた人間と考えることができないだろうか。結果的に、「第七・忘<sup>ほうぎゅう</sup>牛<sup>そんにん</sup>存人」の「真人」とは、内なる精神世界が実は、「外なる世界」である現象界を包み込んでいる状況で生きる人間と説明できるだろう。

●人間を世界から締め出し自己のうちに閉じ込めてしまう側面と、人間を支え保護している側面

ボルノーは、こうした二つの側面—人間を世界から締め出し自己自身のうちに閉じ込めてしまう側面と、人間を支え保護している側面—について、次のように鋭く対極的に記している。「人間は、一つの可能性では、自己自身のなかに閉じこもり、外界とのいっさいの接触を絶つ。これに反して、他の面は、人間を解放し、人間になんらかの真の人間外の現実との接触をはじめて可能にする。それゆえ、人間の外にある支持的な実在性の問題は、幸福な気分状態の基底と、なんらかの仕方に関連しており、この状態の分析は、したがって、もっとも高い存在論的意義をもっている。」(Bollnow, 1979: 148 ボルノー, 1978: 169)

●人間の外部にある支持的な実在性についての存在論的な考察

ボルノーはここで詩人のリルケを登場させる。なぜならリルケは、他のだれよりも実存主義的不安と絶望とを切り抜けてきて、それを真実な詩のかたちで結晶させた人だからである。リルケはその長い人生航路の果てにおおよそ次のように謳った。すなわち、神を見出すためには、人は幸福でなければならない。なぜなら、自分の困窮から神を勝手に創り出すような人は、気忙しく先を急ぐからである。(Bollnow, 1979: 149 ボルノー, 1978: 169)

ボルノーはこうしたリルケのことばを援用することで、人間の外部にある「支持的な実在性」についての存在論的な考察を深めようとした。「神を見出すためには、人は幸福でなければならない」

とは、自分の困窮から発する絶望的な試みは見込みのないものであるという認識である。ここでわれわれに深く理解できることは、<幸福であること>とは、人間自身の努力によって獲得できるものではなく、「恩寵」のようなかたちで人間に授かるものであるという「実在の秘儀」であり、「新たな庇護性」と同義である。(Bollnow, 1979: 149 ボルノー, 1978: 170)

### ●若松英輔の Rilke 解釈：「魂は内なるものであるが、肉体を包んでみいる」

こうしたボルノーの「庇護性」の考え方に呼応するように、先の批評家、若松英輔も、Rilke に詩を送りつけた若い青年に語った Rilke の有名なことば(『若き詩人への手紙』高安国世訳)を引用しつつ、次のように指摘している。「あなたは外へ眼を向けていらっしゃる、だが何より今、あなたのなさってはいけなことがそれなのです。誰もあなたに助言したり手助けしたりすることはできません。ただ一つの手段があるきりです。自らの内へおはいりなさい。あなたが書かずにいられない根拠を深くさぐって下さい。(中略)もしあなたが書くことを止められたら、死ななければならないかどうか、自分自身に告白して下さい」。(若松, 2016: 141)

多くの他の Rilke 研究者もこの点に言及する中で、若松は次のようなユニークな解釈を展開している。若松にしたがえば、外に眼をむけるととき人は行動する。しかし詩を書こうと思うなら、内へ入れと Rilke は言う。ここでの「内」とは現代人が考える内面ではなく、さりとして深層心理学のいう無意識でもない。むしろ内とは、現象と実在、肉体と魂の関係に近いという。様々な現象の奥に実在と呼ぶべき存在を感じる。魂は内なるものであるが、肉体を包んでみいる。それゆえにわれわれは、肉体的な衝撃以外でも、暴力的な言動に触れるとき、身を傷つけられるのである。若松はさらに言う。「この構造は、私たちが暮らす世界空間にも当てはまる。世界の奥に『内なる世界』があるのではなく、『内なる世界』がこの現象界を

包む。」(若松, 2016: 141)

### ●Rilke と『十牛図』の共通項

若松英輔は Rilke に即しつつ、優位性は「内なる世界」にあり、その内なる精神世界が実は、「外なる世界」である現象界を包み込んでいるのだ、と指摘してみせた。『十牛図』でいえば、牛は「内なる世界」であり、牧童は「外なる世界」の現実を表現している。さきに不登校児の例で、どうしても自分の所属する教室に入れなかった子どもが、教師や友達のところからの寄り添いと精神的援助によって、ついには文字通り教室に「入れた」映像を見ることができた。この瞬間、筆者は、若松がいう『『内なる世界』がこの現象界を包む』ことの真の意味を具体的に把握できた。『十牛図』的にいえば、ついに文字通り教室に「入れた」児童は、「第七・忘牛ぼうぎゅうそんにん存人」の状態になっていたとも考えられる。すなわち、内なる世界が現象界を包み込み得る人間になったということである。内なる真実の自己が、現実の外界である自己を包括した真の人間、すなわち、「真人」がこの「第七・忘牛ぼうぎゅうそんにん存人」で成就したのである。

### 引用・参考文献

- \* 生越達著、「引きこもりと自己形成—十牛図を手がかりとして—」, 日本教育方法学会紀要, 「教育方法研究」, 第23巻, 1997年。
- \* 佐藤裕之著, 『仏教と<十牛図>—自己をみつめる—』, 角川書店, 2005年。
- \* 上田閑照・柳田聖山著, 『十牛図—自己の現象学—』, 筑摩書房, 1982年。
- \* 上田閑照著, 『十牛図を歩む—真の自己への道—』, 大法輪閣, 2002年。
- \* 広岡義之著, 『フランクフルト教育学への招待—人間としての在り方, 生き方の探究—』, 風間書房, 2008年。
- \* 広岡義之著, 『ボルノー教育学研究 増補版 上巻』, 風間書房, 2018年。
- \* 広岡義之著, 『ボルノー教育学研究 増補版 下巻』, 風間書房, 2019年。
- \* Bollnow O. F., *Neue Geborgenheit. Das Problem einer Überwindung des Existentialismus.* Kohlhammer,

Stuttgart, 4 Aufl, 1979.

ボルノー著，須田秀彦訳，『実存主義克服の問題－新しい被護性－』，未来社，1978年なお本稿では、「被護性」を「庇護性」に変更している。

- \* 佐伯守著，『経験の解釈学』，現代書館，1979年。
- \* ボルノー著，『新しい教育と哲学』，玉川大学出版部，1978年。
- \* Bollnow O. F., *Die pädagogische Atmosphäre*, Heidelberg, 4 Aufl., 1970.  
ボルノー著，森昭・岡田渥美訳，『教育を支えるもの』，黎明書房，1980年。
- \* 岡本英明著，『ボルノウの教育人間学』，サイマル出版会，1972年。
- \* 高橋浩著，「ボルノー『希望の哲学』における生の二重構造と『超越』」，国際基督教大学学報，教育研究，第25号，1983年3月。
- \* 木村泰子著，『「みんなの学校」が教えてくれたこと－学び合いと育ち合いを見届けた3290日－』，小学館，2015年。および木村泰子自身が作成したビデオを参照。
- \* 若松英輔著，『生きる哲学』，文春新書，文藝春秋，2016年。

『十牛図』 横写絵 元・示現会会員 中村 茂 作  
オリジナルは京都相国寺蔵の伝周文筆「十牛図」である



第一・尋牛 じんぎゅう



第六・騎牛帰家 きぎゅうきか



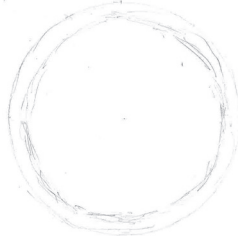
第二・見跡 けんせき



第七・忘牛存人 ぼうぎゅうそんにん



第三・見牛 けんぎゅう



第八・人牛俱忘 にんぎゅうくぼう



第四・得牛 とくぎゅう



第九・返本還源 へんほんげんげん



第五・牧牛 ぼくぎゅう



第十・入鴈垂手 にってんすいしゅ